

欧州視察報告＜５＞

視 察 項 目	地方自治とまちづくり
視 察 日 時	２０１６年１１月９日（水） 午前９時００分～１０時００分
視 察 先 名	ドイツ連邦議会（表敬訪問等）
説 明 者	ゲーロ・シュトアヨハン議員 ケアステン・シュタインケ議員 アネッテ・サワデ議員 クリステル・フォスベック＝カイザー議員 アンティエ・レツィウス議員
担 当	山崎直史

【はじめに】

平成２７年１０月に、ドイツ連邦議会の請願委員会に所属する国会議員とドイツ大使館関係者が本市及び本市議会を視察されて、正副議長と懇談されたことを発端として、今日の訪問が実現した。くしくも当日はベルリンの壁が崩壊した歴史的な日であるとともに米国大統領選の開票日と重なり、限られた時間ながらも内務委員会地方自治体小委員会のアネッテ・サワデ委員長他４名の議員と地方自治制度や国民の政治参加について質疑・応答が行われた。

【ドイツ連邦議会の概要等】

ドイツ議会の構成は、連邦議会と各州の代表からなる連邦参議院の二院制である。ドイツにおける選挙権は満１８歳からであり、連邦議会議員の任期は４年、小選挙区と比例代表の並立制で議席数は５９８名とされるが、選挙制度上、超過議席が生ずることもあり、現在は６３０名となっている。ドイツキリスト教民主・社会同盟（ＣＤＵ／ＣＳＵ）と社会民主党（ＳＰＤ）が二大政党として有名であるが、近年は緑の党や左翼党等が一定の勢力を維持するとともに、海賊党や極右政党の新興勢力の台頭も見られ、単独過半数に届かないことから連立政権が模索されることが多い。

首相官邸と向き合う国会議事堂の議場には国を象徴する黒鷲が掲げられ、議席順などは特に決まりなく自由とされている。後部座席には椅子のみで、机がないことも興味深い。

【質疑・応答】

Q 1 : はじめに地方分権といわれて久しい今日においても依然として中央集権の弊害が残るわが国に対して、州及び基礎自治体の権限が強いとされるドイツの実情と、国と地方の税配分や地方自治のあり方について伺いたい。

A 1 : ドイツは歴史的経緯から州が大きな権限を有しており、今日まで自治体への権限移譲の必要性が叫ばれてきたものの、未だ多くの権限は州に残されている。州間の調整金は政治的な意図を含んだものであり、国民の利害が複雑に絡み合う今日において、万人が納得のいく政治というのは簡単ではない。

ドイツ憲法には万人の平等が謳われ、それが州間の調整金の根拠となっている。制度の大枠は国において作られるものの、子育て分野を含む多くの施策は自治体に委ねられ、その恩恵を被る市民と最も接する機会が多いのが地方議員である。内務委員会地方自治体小委員会では自治体や地方議員との協議を通じてその意見を国政に反映させる公聴会的な役割を担っている。



和やかな雰囲気の中で質疑が行われた

Q 2 : 選挙の投票率が低い原因の一つに、政治への関心が失われつつあることが挙げられるが、ドイツでの状況を伺いたい。

A 2 : 日本に限らずドイツでも政治への関心は失われつつあると言われている。ドイツは日本同様、敗戦後、国の復興という大きな目標の為に国民が不断の努力を重ね、今日の繁栄を築き上げたが、その過程において政治は大きな役割を果たしてきた。しかし、経済が好調で全てが上手くいく時代に生まれた若者は過去の苦難の歴史を知らず、政治への関心が薄れていく中で、投票率も減っていった。地方自治体の首長選挙では投票率は20～40%程度である。

日々の生活が順調であれば政治家の必要性も低下する。ゆえに彼らが投票に向かう動機はネガティブな要因であることが多く、英国のEU離脱や今回の米国大統領選に見るまでもなく自らの利害が守られていないという社会への不満が投票行動に結び付きやすい。それが如実に現れたのが2008年のアメリカ大統領選挙であったが、期待が大きければ大きいほど、その反動としての失望も大きい。

連邦議会の議長はこのように言っている。「日々、様々なことが起きるが、希望を失ってはならない。日はまた昇る。」

Q 3 : 民主主義の根幹は国民の政治参加にあるが、ドイツ国内における女性の活躍や若者の政治意識について伺いたい。

A 3 : 女性の活躍については、政党によっては候補者の5割を女性が占めるよう義務付けられている場合もあり、候補者の確保には苦慮しているケースもある。また、ドイツの自治体の首長には女性の活躍が目立っている。

【総括】

戦後、半世紀以上を経た今日において世界に冠たる発展を遂げているのはわが国と同じ敗戦国のドイツであるという事実は興味深い一方で、

欧州大陸の中心に位置する同国は東西冷戦や米ソ対立に翻弄されてきた歴史を有する。また、現在、移民の受入に積極的な姿勢を示すメルケル首相だが、ドイツは中東諸国と国境を接していないことから、受入れの際には周辺諸国と協調して対応しなければならず、中には不満の声も聞こえることから、EUの盟主としての今後の進路が注目されている。ヘイトスピーチへの対処を迫られる本市において多文化共生が進む欧州の実情を伺えたことは大きな収穫であった。

また、大陸の要衝であったがゆえに数多くの困難に直面したドイツだが、その痕跡や建造物は未だ市内に残存しており、中でもその歴史の象徴とされるブランデンブルグ門とベルリンの壁はぜひ訪れるべきとの勧めがあった。

質疑・応答後には担当職員により国会議事堂をご案内いただいた。歴史的建造物としての外観を残しながらも内部は現代的な設計になっており、随所に過去の歴史を刻む設計や厳重なセキュリティ体制は、本庁舎の再編整備が進む本市においても大いに参考になるものであった。



国会議事堂の施設見学において